

かささぎ 通信 第25号

2014年7月11日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

会誌「かささぎ」に合わせ、第24号からタイトルを「かささぎ」としました。

二〇一四年六月の「森三郎の作品を読む会」では、昭和八年一月号初出の次の二作品を読みました。

「赤鬼青鬼」(筆名 辻乙四郎)

「梅の木」(森三郎)

どちらも「森三郎童話選集 かささぎ物語」所収

「赤鬼青鬼」(あらすじ) 丹波にある地蔵山をはさんだ隣村の二人の村長は従弟同士でした。ある秋の日の夕がた、一人の村長は菊酒を、もう一人はスズキを隣村の従弟に届けるため、下男を使いに行こうとします。でも、地蔵山の峠には毎晩鬼が出るというので、臆病者の下男は行き渋ります。そこで、一人の下男は主人から太刀を借り、また一方は赤鬼の面を借りてでかけます。峠の上で赤鬼に出くわしたと思つた下男は菊酒と太刀を放り投げて逃げ帰り、主人に叱られて今度は青鬼の面を借りてもう一度峠まで出かけます。ところが、さつき赤鬼だと思つた男は実は隣村の村長宅の下男で、菊酒を飲んで酔つ払っているではありませんか。今度は青鬼の出現に驚いて、酔つ払っていた下男が逃げ帰る間に、こちらも菊酒を飲んで酔いつぶれるのですが……。

(感想) 逃げ帰って主人にでたらめな言い訳をするやり取りは、何だか狂言の筋立てのようです。狂言には、主人から使いを言い渡された臆病者の太郎冠者が、使いを放棄して帰り、主人にはでたらめの武勇談を並べ立てる話があるいろいろあります(例：空腕)。その際に鬼の面を小道具に使う話もあります(例：清水・抜殻)。森三郎作品にはこれまでにも「あぐひ太郎」や「藤五三郎」など狂言を題材にした話がありました(通信第6号・第19号)。この「赤鬼青鬼」の面白さは、主人と下男、また下男同士の掛け合いの滑稽によるものでしょう。森三郎さんは狂言の手法を用いて人と人のつながりの面白さを書こうとしたのではないのでしょうか。

「梅の木」も古典を題材にした作品です。万葉集の巻五にある山上憶良の短歌二首から、梅の花を愛した山上憶良夫妻と古日という病弱の息子の話に仕立てています。万葉集中では、太宰帥大伴旅人邸の梅花の宴での歌となつている「春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つや春日暮らさむ」と、古日という名の男の子を思慕した長歌に対する反歌「若ければ道行き知らじ賂(まひ)はせむ下への使ひ負ひて通らせ」の二首が元の歌です。あらゆる手立てを尽くして神々に祈つたけれどその甲斐なく幼くして病死した古日に対し、父親として子の後生の安穩を願う気持ち表れていきます。古日は憶良の子どもではなく、子を亡くした知人の悲しみに深く共感を覚えて作つた歌とされています。森三郎の「梅の木」では憶良一家を見つめる梅の木と鶯がいわば狂言回しの役をしています。森三郎作品中、実在の人物を主人公にした話で、人間以外の者に関する話をつなげる例は、平安時代の女流歌人赤染衛門と文章博士大江匡衡の話「雁」にもありました(通信第22号)。また、万葉集の歌を題材にした作品には「三條中納言」(通信8号)・「鼻のはれもの」(通信第12号)がありました。しかし、この「梅の木」は、家族の喜びと悲哀を作品にまとめている点で、今までの万葉集二作品とは違います。先回の「通信第24号」で紹介した「タニシ太郎」も、昔話の体裁を取りながら、家族のありようを描いていました。森三郎童話に共通するテーマが少しずつ形を現しているように思います。

報告 6月19日、雁が音中学校で社会科の研究授業(石橋保尚先生)を参観しました。大正時代の文化を考える一環として「赤い鳥」の童話作家・編集者であった「森三郎」を取り上げた単元です。単元の初めに「赤い鳥」創刊号の扉の「赤い鳥」の標榜語(モットー)をしつかり学んでいて、それを踏まえて、森三郎が「三重吉追悼号」まで「赤い鳥」に関わっていた意味を皆で話し合うという、意欲的な授業でした。

○ 次回予定 8月8日(金) 午後1時〜3時 「猿・だぶつ子」「赤い鳥」昭和8年3月号初出、「森三郎童話選集 夜長物語」所収